

ベトナムにおける農村間人口移動 —メコンデルタ「新経済村」研究報告—

岩井美佐紀

はじめに

本稿は、平成 19～21 年度神田外語大学研究助成「ベトナム農民の移動パターンと都市・農村への定住過程」の 3 年間の研究成果に関する報告である。本研究は、筆者が研究代表者を務めた平成 15～18 年度文部科学省科学研究補助金研究（基盤 B（海外））「ベトナムにおける南北デルタ農村の人口移動に関する社会学的考察」において得られた知見を踏まえ、近年のベトナム村落のドラスティックな経済的・社会的変化を考察することを目的としている。特に、本研究が主に焦点に当てたのは、農村間の組織的人口移動によって出現した、従来の村落とは異なる行政村の態様である。

本研究のメンバーは、筆者と本学非常勤講師の大野美紀子氏の二人である。以下で述べるように、我々が定点調査しているメコンデルタの村落は、南北それぞれの地域からの移住民によって形成されたフロンティア開拓村で、ベトナムで一般的に「新経済村」と呼ばれる。この「新経済村」という聞きなれない村落は、いわば国家によって企画された人工的空間である。筆者はこれまで主に北部の紅河デルタ村落の社会変容を研究してきたが、一方大野氏は主に南部のメコンデルタ村落史を研究してきた。このような研究者のバックグラウンドも、本研究の重要な要素である。なぜならば、本研究の調査地は、まさに南北出身移住者混合集住地域であり、南北間の長距離移動（岩井担当）、南部域内の近距離移動（大野担当）それぞれの特徴を理解できなければ、農村間人口移動の多様性を示すことができないからである。

本稿は、これまでの共同調査を基に、筆者が行った北部出身入植世帯のメコンデルタへの移動・適応過程を中心に扱う。

1、研究の概要

まず初年度の2007年度の研究活動について簡単にまとめておきたい。我々は2007年8月に、調査地であるロンアン省ヴィンフン県カインフン行政村において、2003年度より行ってきた文科省科学研究助成基盤研究の補足調査を行った。この調査の中で、同村において保健省が全国規模で全戸世帯調査を行い、同村でも2005年末に調査員が各世帯を訪問したという情報を得て、さっそく村の診療所に頼み込み、同村内の全ての集落の世帯台帳を入手した。これにより、同村在住の全世帯の家族構成、出身地、出生年、住民登録種別などを明らかにすることが可能になった。

2年目の2008年度は、前回の科学研究費助成研究プロジェクトも含め、これまでの同地域で研究成果を発表する機会を得た。ベトナム・ホーチミン市にて南部持続発展研究所のブイ・テー・クオン所長とともに「Di Dân ở Việt Nam trong Thời Kỳ Hiện Đại Hóa, Công Nghiệp Hóa (Population Movements in the Period of Modernization and Industrialization in Vietnam)」と題する国際シンポジウムを共催した。このシンポジウムは、日本側から7名の研究者が発表し、ベトナム人研究者の発表、コメンテーターなどを含めると総勢15名が参加した。その他、ロンアン省ヴィンフン県カインフン村の各級行政機関の幹部5名も参加し、同調査の現地社会への社会的貢献についてスピーチした。同シンポジウムは、発表および議論ともにベトナム語で行われた。

最終年の2009年度も、大野氏とともに2010年2月末から3月はじめにかけて再び同村にて継続調査を行った。主な内容は、各集落の個別世帯への訪問インタビューである。筆者は主に北部紅河デルタのハイフン省（現ハイズオン、フンイエン省）出身移住第2世代、すなわち幼少期に親と共に長距離

を移動し、現地で育ち、結婚した世代の婚姻関係を調査した。特に、配偶者の出身が異なる南北間ハイブリッド夫婦へのインタビューを中心に行った。

2、成果と意義

2-1 調査村の概観

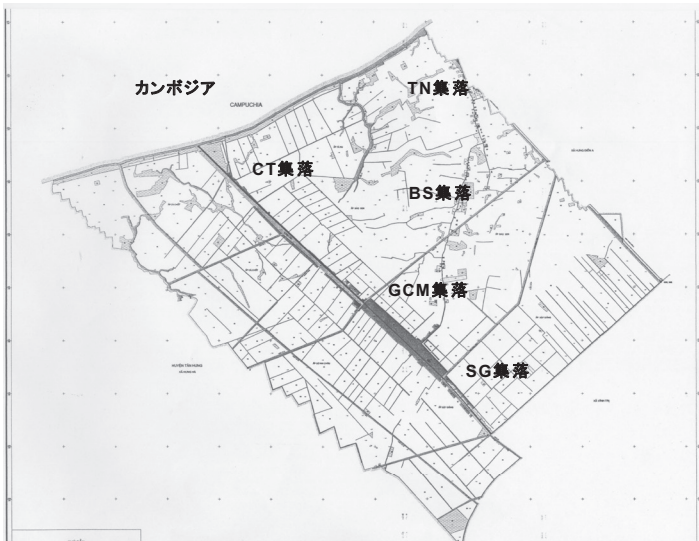
以下の地図1は、調査村のロンアン省ヴィンフン県カインフン村の位置(星印)と、紅河デルタのハイフン省からの長距離移動のルートとロンアン省内からの短距離移動のルートを示している。ハイフン省からは、およそ1800キロの道のりを南北統一鉄道とバスを3日間乗り継いで、現地に到着している。一方、ロンアン省内の人口稠密な市・県からは、およそ100キロの距離にあるため、バイクやバスを使って数時間で往來することが可能である。

地図1 長距離・短距離移動ルート



次に、カインファン村の全体地図を以下に示す。

地図2 カインファン村全体図



出典：ロンアン省地政局

カインファン村は、地図2示されているように、メコンデルタの北部に位置し、カンボジアと国境を接する。南部の商業都市ホーチミン市から西北に約300キロメートルの距離にある農業専業村である。同村は、ドンタップムオイとよばれる広大な氾濫原湿地帯に「新経済村」として1991年に形成された、極めて新しい行政村である。開村に先立ち、1988年から同じロンアン省内の人口稠密な地域から開拓移住政策が段階的に実施され、1990年からは北部のハイファン省を送り出し先とする開拓移住民を受け入れてきた。同村の成立過程については、[大野 1998：17-39]に詳しい。

同村は、全体で5つの集落で構成されており、人民委員会、学校や市場など村の行政・経済の中心はGCM集落に集中している。2000年の大洪水をきっかけに洪水対策用のクラスターが造成され、現在村内にはGCM集落とCT集落に *cum dân cư* と呼ばれる都市空間のような計画居住区が建設されている。GCM、CT および SG 集落は主に南北村落からの政策入植した世帯によって構成されている。一方、BS、TN 集落は、カインフン村が成立する以前から同地に居住していた、いわゆる「地元民」と自称する人びとや、カンボジア紛争によってカンボジアから避難して来た「越僑」によって構成されている。地形的には、水はけのよい砂丘列の微高地に集住し、自然集落を形成している。

同村の形状は、地図2を見てもわかるように、集落間の境界はきわめてあいまいである。隣村との境界も同様にあいまいである。

約63万ヘクタールに広がるドンタップムオイ地域一帯は、肥沃なメコン河の土砂が流れ、雨季の半年間は冠水するという気象条件だけでなく、硫酸酸性土壌で稲作に適さないという生態的条件のため、大規模な国家開発が必要な地域である。

2-2 成果

ここで調査の全ての成果をまとめ、全体像を示すことはできないが、移動および適応過程に関して、以下いくつかの論点を示しておきたい。

まず、人口の把握、そして家族構成である。実は、このような基本データを収集することは、ベトナムの辺境の村では極めて難しい。移民社会の人口統計は、治安に責任をもつ村の公安の住民登録台帳が唯一の公的資料となるが、公安が作成した手書きの住民登録一覧はごっそり数十世帯の情報が抜け落ちていたり、すでに離村していたりと、全く当てにならなかった。2005年の世帯台帳によれば、全体が1271世帯で、BS集落が185世帯、TN世帯

が 157 世帯、CT 世帯が 292 世帯、SG 集落が 167 世帯、そして GCM 世帯が 470 世帯である。そのうち 962 世帯が夫婦と未婚の子どもからなる核家族である。

国家の開拓移住政策により移住してきた人びとは、一世帯 2 人分の労働力という条件を満たしていれば一律に約 1・5 ヘクタールの土地を分配された。長距離の南北移動を経てきたハイフン省出身の農民たちに対しては、その他すぐに入居できる住宅も用意された。このような住宅手当は、ロンアン省内の短距離移動を経てきた入植世帯には適用されていない。その理由は、数日間をかけて長距離を移動する北部農民の場合、若い夫婦と未婚の子どもの子家移住が多く、再定住のための便宜を図る必要があったためである。一方、ロンアン省内の近距離移動者の場合、父親と成年の息子、兄弟など、労働力の組み合わせは臨機応変に変化し、故郷と現地の季節的循環移動を繰り返すため、住宅は用意されない。以下の 2 枚の写真は、1990 年にハイフン省から移住してきた農民たちの住居を筆者が 1997 年にはじめて現地を訪れた際に撮影したものである。



写真 1 SG 集落の北部出身移住者の住居 写真 2 住居の後方に水田が広がる

カインフン村では、政策入植してきた南北出身の人びと以外に、1990 年代半ばから、近隣の農村から農地を購入し移り住む、いわゆる自発的移住者

が急増した。彼らは、入植当初極めて劣悪な環境に耐え切れず放棄・離村した人びとの土地を買い取り、営農を現地で始めており、主にGCM集落に集住している。彼らは総じて営農経験が豊富で比較的裕福な農民たちであり、村の中心でインフラ施設の揃うGCM集落の区画を買い、雑貨や小間物を売る店も構える。GCM集落の人口が他の集落よりも圧倒的に多いのは、このような事情による。

次に、北部ハイフン省からの入植農民の営農状況とそれに伴う意識の変化を三段階に時期区分してみたい。

(1) 90年代前半：移動および生態的適応期

この時期が一番困難で、多くの離農者を出している。酸性で土壌が悪いために数年間は土壌改良のため収穫がほとんど見込めず、さらに農作業の仕方が北部と全く異なっていたため、経験がなかったことが大きい。北部では田植え（移植）に慣れていた彼らにとって、直播後、間引くという作付け方法は初めての経験であった。自給用の飯米生産から商業米生産に転換した結果、耕起のトラクターによる機械化、化学肥料と殺虫剤の大量投与、農業賃労働者を雇用しての収穫等、コストが膨大にかかる南部型の農業に慣れていかなければならなかった。そのため当初は、地元の人達のやり方を見よう見まねでやるしかなかったという。しかも初めの数年間、鼠害が深刻で不作がずっと続き、期待した収益が上がらなかった。

また、故郷の家族から離れて精神的に孤立したことも負担が大きかったようである。地縁・血縁関係が緊密な北部農村では、何かあるとすぐ親戚や近所で集まって食事をとる習慣が根付いていたが、そういった機会がなくて寂しかったようである。

この時期の土地は全く価格がつかなかった。離村する者が残る北部農民に譲渡しようとしても、打診された農民は自力で耕作する自信がなく、あえて受け取って耕作地の拡大を図ろうとする者はいなかった。そのため、営農を

諦めた農民たちは、分配された土地を二束三文で売って、ドンナイ省やブントウといった工業団地や観光地に近い土地に移り住んでいた親戚の元に身を寄せた。半数ぐらいの世帯がこの時期に流出している。残った農民たちは、地元民の土地で農業労働者として雇われ、日々の糧と自作地への農業投資の費用を工面した。

(2) 1990年代後半：安定期

この困難な時期を過ぎると、耕地に値段が付くようになってくる。つまり、稲作の生産量が安定し、米の販売も商業的ベースに乗り始めたため、経営状況が大きく改善された。この第二段階の時期には、土地を担保に国家銀行の融資が受けられるようになってきている。そのために化学肥料をより多く買えるようになり、益々生産が上がるという相乗効果があったという。

入植時に1.5ヘクタールの土地からスタートし、現在は4ヘクタールの土地を保有し経営している成功した農民によると、SG集落での土地購入代金は94年の時点では1ヘクタールで300万ドンぐらいであったが、97年になると、2000万ドンに跳ね上がっていたという。このように土地は高騰して資産価値を持つようになった。

(3) 2000年以降：発展期

カインフン村中で土地を購入することは困難になり、もし経営面積を拡大したいと考えるなら、他村の土地を買い求めるしかない。従って、隣接する行政村に数箇所へ渡って土地を保有し、経営している農民もいる。経営者としての自覚が確実に北部政策移民の中にも育ってきており、企業家農民として経営をより大規模に組織化していこうとする動きが顕在化していると思われる。この時期は1990年代末に始まった北部の出身村からの連鎖的移住が顕著になっていった時期でもある。

一方、北部の入植者同士の地縁的つながりがより強固になってきているのも、この時期の特徴といえる。例えば、SG集落の青年団や女性連合支部な

ど各種社会団体の寄り合いや集会は、他の集落に比べると極めて多い。例えば、3月8日の国際婦人記念日には、集落の女性連合支部メンバーが集合し、リーダーの自宅で料理をつくり皆で食事を囲む。その他、集会や報告会などの後には、自主的に食事会を組織する。同郷会も組織され、ハイフン省出身者を中心にSG集落の「郷約」(慣習法)が制定された。

最後に、移住第2世代の婚姻状況を若干述べておこう。ハイフン省出身の政策移住世帯の動向についてみると、これまでに19件の婚姻の内、同省出身者同士の婚姻が15組(その内、同じ村出身7組、他村出身8組)で圧倒的に多いが、合計6件の南北出身カップルが誕生している。この組み合わせが興味深い。北部出身の妻と南部出身の夫のケースが4組で、一方北部出身の夫と南部出身の妻のケースは2組に留まっている。同省内出身者同士で結婚しているケースについて、本人たちにその理由を聞いても、はっきりとした回答が返ってくるわけではないが、共通の価値観や生活感覚ゆえに親近感が湧きやすいと思われる。他方、南北間ハイブリッド夫婦については今後さらに考察を進める必要があるが、暫定的にいえるのは、父系親族関係が比較的強い北部の故郷の社会関係から離れると、それまであまり重視されてこなかった母方・妻方の親族関係が実は大きな意味を持っているということであろう。

2-3 意義

まず、本研究の第一の意義として、南北の農民が初めて出会い一つの村落に適応していく中で、ある意味「化学反応」のような相互作用を起こしていくプロセスを丹念に描くことができる。地元民、南部域内の政策・自発的入植者、そして北部出身の政策・自発的入植者の多様なアクター間で繰り広げられる相互協力、対抗、無視、無関心などの相互作用は、これまで存在していながら表面化してこなかった複雑な関係性を浮かび上がらせる。さらに、

移動に関しても、長距離移動と短距離移動では農民の現地社会への適応過程に違いが見られることにも注意を払う必要がある。これは、従来の静態的な南北村落論—[Rambo 1976；2005] から引用すれば、紅河デルタ村落を境界の明確な「閉じた」社会、メコンデルタを境界が不明確な「開放的な」社会とする二元論—を超えて、より多面的で重層的な社会関係を明らかにする上で、極めて重要な問題提起を可能にするのではないかと考える。

本研究のもうひとつの意義として、国家の中心から最も遠い辺境の新開地の村が決して自給自足を目的としておらず、むしろ国家の大規模な投資を受けてメコンデルタの商品米生産の拠点となっているという事実である。特に、1990年代半ば以降、農業生産も安定し、移住民たちの暮らしは飛躍的に向上した。カンボジア国境の村という地政的条件から、国家のインフラ投資はこのような辺境の村に重点的に投入された。開拓移民政策の本来の目的である、国内人口の再配置による生活全般の安定という社会・経済政策は、このような視点から同地域においては、ひとまず成功したといえるのではないか。この点は、国家と社会の関係を考える上で重要な要素となるであろう。

以上が北部の村でもなく、南部の村でもない、もう一つの村「新経済村」を研究する意義である。

3、本学の教育への還元・社会的貢献

本研究の研究成果は、国内外に向けて公開することによって広く社会へ還元されること、日本・ベトナム間国際交流へ何らかの形で寄与することを前提としている。

これまでにその取り組みの一環として、上述したように2008年8月22日にホーチミン市で神田外語大学とベトナム社会科学研究所・南部持続発展研究所によるシンポジウム「Di Dân ở Việt Nam trong Thời Kỳ Hiện Đại Hóa, Công Nghiệp Hóa (Population Movements in the Period of Modernization and

Industrialization in Vietnam)」を共催した。同シンポジウムの内容は、その後各執筆者の加筆修正を経て、2010年3月に南部持続発展研究所よりその成果がプロシーディングスという形で刊行された。

また、並行してこれまでの当該研究テーマの集大成として『新しい故郷—メコンデルタ新経済村の生成と展開—(仮)』を本学から刊行予定である。

本研究では、これまでより積極的かつ広範囲に神田外語大学を発信拠点とする活動を重視し、1. 著作の英語版編集・刊行、2. 本学の学生に対する教育・国際交流機会の提供を予定している。とりわけ、教育分野における還元として、これまでに培ったベトナム側各研究機関との協力関係を基盤とし、本学の学生の現地研修に現代ベトナム社会の多面性を実体験し、ベトナム側同世代人と交流する企画を盛り込んでいきたいと考えている。

参考文献

岩井美佐紀編『ベトナムにおける南北デルタ農村の人口移動に関する社会学的考察』（課題番号 15401040、平成15年度～平成18年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書、2008年3月。

大野美紀子「メコンデルタにおけるドイモイ後の集団入植について—ロンアン省カインハウ行政村の事例より—」『南方文化』第25輯、17-39ページ。

IWAI Misaki-Bùi Thế Cường chủ biên *Kỷ Yếu Tọa Đàm: Population Movements in the Period of Modernization and Industrialization in Vietnam*), Viện Phát Triển Bền Vững Vùng Nam Bộ - Đại Học Nghiên Cứu Quốc Tế Kanda, Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, 2010.

Rambo, Terry. *A Comparison of Peasant Social Systems of Northern and Southern Viet-Nam: A Study of Ecological Adaptation, Social Succession, and Cultural Evolution*. Carbondale: Center for Vietnamese Studies, Southern Illinois

神田外語大学紀要第23号

The Journal of Kanda University of International Studies Vol. 23 (2011)

University (Monograph Series III), 1976.

--- *Searching for Vietnam – Selected Writings on Vietnamese Culture and Society.*

Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University Press, 2005.